室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

特性語及び形容詞チェックリスト

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-06-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田中, 潜次郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3368

特性語及び形容詞チェックリスト

田　中　潜次郎

Trait-adjectives and an Adjective Check-list

Senjiro Tanaka

An adjective check-list (ACL) as a simple technique for assessing personality was developed. ACL, the items of which contained 105 common trait-adjectives, was administered to 487 male college-students, and was analyzed by the method of pattern classification. Four dimensions were extracted. The first and second dimensions were highly correlated respectively with "introversion-extroversion" and "likableness" rating-scales. The third seemed to indicate the dimension of "tension". The fourth was not interpreted.

特性語（trait-adjectives, trait-names, trait-words）とは，人の性格ないしは人格を表現する日常の単語および非常に短い語句を指す。操作的には，特性語の条件を予め決め，これに沿って辞書から取出される単語であると定義できる。或いは，普通人の記憶を辞書とみなし，この中から「性格を表わす言葉を書くように」という教示下で取出される単語だということもできる。

次に，形容詞チェックリスト（Adjective Check-lists, 以下 ACL と略称）とは，形容詞を質問項目として，これに対する諾否を評定者に答えさせる方法を指す。この方法の起源は，言語の中に対象の様態を表現する一群の単語すなわち形容詞が発生したときまで溯ることができるが，心理測定法の一種と認めうるほどに整備されたのは Hartshorne and May(1930)*からであるといわれる。その後，種々の対象の様々の様態を表現できるという形容詞の性質

* Hartshorne, H. and May, M. A. 1930 *Studies in the nature of Character : III. Studies in the organization of character.* New York: MacMillan. ——Gough and Heilbrun より引用——

の故に，ACL は態度，感情，性格などいろいろの心理現象に対して適用されてきた。しかしここでは，形容詞の一部をなす特性語を項目とする場合，従って性格を測定対象とする場合について ACL という名称を使用する。これは Gough and Heilbrun (1965) の使用法に従ったものであるが，厳密には特性語チェックリストと呼ぶべきものであろう。なお，ACL はその項目が単語である点で，文章表現を項目とする人格質問紙 (Personality questionaires) とは異なり，評定形式が「はい」か「いいえ」の二分型である点で，「かなり」や「すこし」のような段階を設ける評定法 (Rating methods) とは異なる。

さて，ACL はその項目が日常の単語から成るため，きわめて短時間に実施できること，評定者に不安感や抵抗感をあまり生じさせない，といった長所をもつ。Gough and Heilbrun はこれに着目して 300 語 24 尺度から成る ACL 標準版 (the Adjective Check List) を作製した。そしてこれを人格質問紙に準じる測定法として位置づけているようである。このような ACL の特徴づけは大筋において適切だといえるが，ただ，特性語を項目とすることから自ら生じる ACL の測定側面の特異性に対しても当然配慮する必要があろう。

そこで，本稿ではまず，特性語がどのような性質をもつものかを知るために，諸家の特性語論を検討する。ただ心理学において問題とされるのは特性語によって指示される人格側面であって，特性語そのものではない。後述する諸論にしても Allport を除けば，特に目立つ議論は展開されていない。従ってここでの作業は，諸家の人格論ないしは特性論の中に含まれる特性語論を抜き出すという形をとることになるだろう。次に，これらの所論を参考にして特性語の特徴づけを行い，ACL 作製への手順について考察し，最後に ACL の作製適用例を提示し，人格質問紙との比較をする。

1。G. W. Allport の特性語論

Allport は，個々の人格の独自性を重視する点で，自我心理学や臨床心理学の分野で高い評価を受けてきた。また彼は，人格理論の中に特性 (traits) の概念を導入した点で，のちに因子分析法と結合して展開される共通特性理論

の先駆者としても評価されている。

しかし本稿は，人格や特性そのものを問題とするのではなく，そのレッテルである特性語を問題にするのであるから，上記の評価とは異なる点に注目することになるだろう。すなわち，彼は特性語を収集分類する研究を行なったが (Allport and Odbert, 1936)，ここにみられる Allport の方法論の特徴を一口にいうならば，病理的，数理的，実験的，哲学的といういわば専門的な接近法をとらず，むしろ私達が日常接する事柄から問題をとりだし，その水準でこれを整理するが，それ以上の抽象はむしろ避けようとする，という意味で常識的立場にたつというところにあるように思われる。

Allport and Odbert はその論文の冒頭に，性格学者 Klages の次のような言葉を引用している。

> 言語は無意識的洞察においていかなる秀れた思想家の鋭さにも勝っている。適度の才能を持つ者なら人間の心に関する語句を調べるだけで，それを怠ったどんな賢人よりも人間の心をよく知るであろうし，観察や機械や実験によって得られる知識のたぶん千倍の知識は手に入れるであろう。
>
> ——Ludwig Klages, *The Science of Character*, p. 74.

やや大胆に過ぎるともいえるこのような言葉を敢えて引用したところに，Allport の特性論が日常生活で使われる特性語の注意深い検討から出てきたことが伺える。このような態度が実際の論述の中でどのように展開されるかを次にみていこう。

Allport における特性の概念は抽象的でもあり，また具体的でもある。これが抽象的にみえるのは，行動論的な諸概念のように行動に直接的関連をもつ水準で設定された概念ではなく，より内的な状態に関する概念として設定されているためであろう。一方，この概念は特性語の意味する概念枠に，完全にではないがかなりよく対応する。この点で特性はきわめて具体的な概念だといえる。たとえば「A君は正直だ」という言明は，A君が現実の場面でとる行動には直接言及しない点で，あいまいで根拠のない言明だともいえる。しかし，このような言明がひんぱんになされる背景には，これによってA君の過去の種々の行動をよく理解できるし，将来A君が様々の場面で起すであ

ろう行動を予測できる，という普通人の判断があると考えられる。こうしてAllportは「正直」などの特性語にほぼ対応する人格要因すなわち特性の存在を想定する。このようにAllportにおいては特性語は，特性という実在の対象，もしくは実在が想定される対象を表現する枠組と考えられている。

ここで注意すべきことは，今日までの多くの人格理論の人格記述がきわめて難解な専門的概念によってなされているのに対し，Allportは日常語で人格を記述しようとする点である。この点で，Allportの特性論は，他の多くの専門的理論とは大きく異なっているのである。

1）対象枠としての特性語

ここでは，特性という概念の特徴を，オルポート（1968）に従って，他の構成概念と比較して説明する。なお，以下に述べることはすでに多くの心理学者が紹介してきたところであり，これをくり返す必要はないとも思われるが，ここでは，特性語を念頭において特性を論じる立場から紹介したい。

①感情と特性との相異：感情は一定場面での心の一時的な状態であるのに対して，特性は場面依存の少ない心の比較的恒常的な状態である。これを表現用語から区別すれば，たとえば「恥ずかしい」は感情語であり，「恥ずかしがり」は特性語だといえる。表現用語の面からみれば，感情と特性は比較的容易に分類できるようである。

②習慣(habits)と特性との相異：習慣は学習心理学の基本概念の一つであるが，これをオルポートに従って人格心理学の分野に適用すれば，次のような点で特性とは異なる。すなわち，習慣は個々の行動へ向う傾向を指すのに対して，特性はこれらが統合された一般的傾向を指す。たとえば，「毎日歯をみがく」や「食事前には手を洗う」や「いつも清潔な下着をつけている」のような表現は個々の習慣に言及するものである。これに対して，これらの行動の背景には「きれい好き」という特性が存在し，これが個々の行動を統制する，とAllportは考える。

なおこのAllportの考え方に反対する立場に反特性論（anti-trait theory）がある。これによれば，もし特性が個々の行動を統制する働きをもつ人格単

位であるならば，単一の特性から生じる複数の行動の間には共起的な傾向がみられるべきである，とする。これを検証すべく，いくつかの「正直な」行動の出現傾向を調べた結果，これらの行動の間には有意な相関が見出せなかった。従って，正直という特性を経験的な単位として認めることはできない，と反特性論は考えるのである。

しかし習慣に対する特性のちがいは上述の面だけでなく，次のような面にもみられる。すなわち，習慣は行動それ自体へ向う傾向を意味するが，特性は行動の機能への反応傾向を意味する。たとえば，「礼儀正しい（*polite*）」人間は，或る文化圏にあるときには食事中にゲップをしないが，別の文化圏にいるときには食事に満足していることを示すために進んでゲップをする。ゲップをするとしないとは行動の現象面では相反するが，各文化における行動の機能の面では同一である。このような機能的等価化がなされるのは，*polite* という特性をその人間がもつためである，と Allport はいう。例はあまり適切なものとはいえないとしても，特性に機能的等価化の働きがあるとする点は他の心理学者のよく注目するところである。しかしここでそれに劣らず注目されねばならないのは，そのような働きをもつ特性を適切に表現する *polite* という名前が既に日常語の中にある，という事実である。

③態度（attitudes）と特性との相異：まず，態度は特定の対象に向けられた傾向を意味するのに対し，特性は様々の対象に向う一般的傾向を意味する。また，態度は対象に対して接近―回避という運動的特徴をもつが，特性はそれに至る以前の内的状態をいう。

これを表現用語の面から考えれば次のようになろう。たとえば，多くの場合にA君は「人なつっこい」が，B君は「つっけんどん」であるとする。ここではA君は「人なつっこい」という特性をもち，B君は「つっけんどん」という特性をもつといえよう。ところがC君の場合には相手によって「人なつっこく」なったり，「つっけんどん」になったりするとしよう。このC君の特性は「好き嫌いがはげしい」とか「裏表がある」のような文章で表現するのが適当であって，「人なつっこい」や「つっけんどん」はむしろC君のその

相手に対する態度をあらわすと考えるべきであろう。

ともかく，特性は人格心理学的概念であり，態度は社会心理学的概念である。そして各々は各々の分野で欠くことのできない重要な概念であって，一方を他方に還元するのは危険であろう。しかし，その表現用語の点からみると，両者には重複する部分がかなりあるようである。

④因子或いは次元（factors or dimensions）と特性との相異：最近の著書（オルポート，1968）では，以前には（Allport and Odbert, 1936）特性で一括されていた概念が，共通特性（common traits）と個人的傾性（personal dispositions）とに分けられている。そして，特性は共通特性と同種の概念とみなし，因子や次元に近い概念と考えてもさしつかえないと述べている。なお，個人的傾性に特性の概念を適用するのを止めたのは，後に述べるように，特性語が個々人の独自性を完全には表現しえないことを認めたためであろうと思われる。

さて，特性が因子や次元と同種の概念であるというのは，その概念の適用領域が同じであるということに過ぎず，概念それ自体の性質にはなおかなりの相異があることに注意する必要がある。すなわち，因子や次元は因子分析や多次元解析にもとづく統計的な概念であるのに対し，Allport における特性はあくまで特性語を背景とする言語的な概念とみるべきである。また，因子や次元は解析手順の性質上その数が少なくされ，説明概念としての特徴が強調される。一方，Allport における特性は，行動を説明する構成概念であると同時に，記述概念の色彩をなお強く残している。従って特性の数ははなはだ多く，少なくとも特性語の数だけは存在することになる。

2）特性語による特性表示の限界

Allport の特性論において特性語が果す役割の重要性については既に述べた。しかし彼は特性語に全幅の信頼をおいてはいなかった。特性語の限界について，次に述べる①は当初から彼が認めていたことであり，②はのちに彼が認めたことである。さらに③はのちの他の研究者の指摘することである。

①特性語の数の不足：Allport and Odbert によれば，特性は実在するもの

であり，そしてこれを正確に表示したいという欲望が人間にはあるので，特性語が発生したという。それではすべての特性に既に名前がついているのであろうか。彼等によれば，まだ名前のついていない特性は沢山あるという。このような特性語の不足を補うために，句や複合語や比喩などが使われてきた。たとえば，「彼なら自分の葬式にも遅れてくるだろう」という表現には，*tardy* という特性語とは異なった独特の迫力がある。また，小説や伝記では或る人物のもつ一つの特性を，特性語を使わずにたとえば次のような文章で表現することがある。

> ゲーテは何事にも真実はあるという信念をもっていたので，どんな人物のどんな意見にもていねいに耳を傾けた。 (Allport and Odbert, p.31)

②個人の独自性表示の限界： Allport and Odbert は類義語をまとめようとはしなかった。これは，彼等が類義性 (synonymy) という考え方自体に疑問をもったからであると思われる。

たとえば，神経症 (*neuroticism*) と内向性 (*introversion*) の間に統計的な相関があるとすれば，因子分析的研究では両者は単一の因子にまとめられてしまう。しかし個々の人間をとってみれば，神経症が中心的な特性であって，内向性はこれから派生した特性にすぎぬ人もいる。他方，内向性が中心的な特性であり，神経症とはみなせない人もいる。この場合には，神経症の人にある葛藤が存在しないからである。このように個々の人間をとってみれば，その内部で演じられる諸特性の役割は様々であるから，表面的な相関だけでみるのは危険だという (pp. 15−16)。

個々の特性語の類義性よりは独自性を強調する傾向は次の事例にもあらわれる。すなわち，「神を恐れるが臆病ではない (*fearful* but not *cowardly*)」とか「高潔であるが高貴ではない (*upright* but not *honorable*)」のような表現を，統計的心理学では，文学的ないいまわしの違いにすぎぬとして，類義語か同義語としてまとめてしまう。しかし Allport and Odbert によれば，*fearful* but not *cowardly* な人間は第一次大戦時の戦士の中に実在したし，*upright* but not *honorable* な人間は昔のピューリタンの中に実在した。従ってたとえ

ば，ピューリタンを理解するためには，*upright* と *honorable* とは厳密に区別されねばならない，という（p．32)。

このあたりの事例になると，Allport の根本姿勢である日常用語からの考察というよりは，むしろ，精神科医が患者の症状を記述する場合や，思想史家が一定の時代精神を表わす鍵となる概念を探す場合などにみられるような専門的な言語使用を行なっているようにも思われる。しかしそうはいっても，Allport にあっては，特性語は何よりもまず個々の人格の独自性を記述するものでなければならなかった。そのためには特性語相互の類義性よりは，むしろその独自性を強調する必要はあったのである。

しかし，のちの著書（オルポート，1968）では，個々の人格の独自性すなわち個人的傾性は特性語によっては十分には記述されえないことを認めて次のようにいう。

> ……しかしわれわれが今，特徴に対して名前を与えているというこの事実は，個人の生活から特徴を抽象し，それがあてはまるような他の生活に適用しようとしているにほかならない。言語は一般的なものである。〝この少年〟という場合ですら，……二つの抽象語を用いているのである。フランクリン・ルーズベルトというような固有名のみがやっと自然界における一つの独自の個人的事象を名指すのである。(460ページ)

たしかに，固有名の果す役割の重要性は，私達の生活の随所に見出されることである。たとえば，経験豊かな教師は何はともあれ生徒達の名前を迅速におぼえてしまうものである。そのことは，生徒達が「活発」か「おとなしい」か，算数が好きか嫌いかを知る以上に，彼等を知ることになるからなのであろう。なおオルポートは別のところでも（142－146ページ)，自己同一性の形成に固有名が重要な役割を果すことに言及している。

ところで，特性語は固有名のように個人の独自性を表現する機能をもちうるであろうか。たしかに言語発達の初期にはそのような機能をもつことがある。たとえば或る幼児においては，自分や自分の所有物はすべて「かわいい」のであって，「すてき」でもないし，「かっこいい」のでもない。そして「かわいい」という表現は他の誰に対しても適用されてはならず，自分に対して

のみ適用されるべき表現なのである。つまり，この幼児においては「かわいい」はその幼児の固有名と類似の機能をもつ。しかし，言語発達はこのような記号と特定の対象との融合の段階から，両者の間に距離が生じていく（distancing）過程を含むといわれる（Werner and Kaplan, 1963, Chap. 3)。固有名以外の指示語はいずれもこの径路をたどって概念形成されていく。特性語もまた，特定の人格から離れていき，抽象されていくのであろう。

③特性語の非評価性への疑問：特性語と特性の関係を一般的にみれば，名前と対象の関係である。この関係に関する見解として，Allport and Odbert は素朴実在論（naive realism）とスコラ的実在論（Scholastic realism）と唯名論（nominalism）を挙げている。素朴実在論では，名前に対応して対象が実在するとされる。スコラ的実在論では，実在は「真」,「善」，あるいは「美」のような観念自体に求められ，外に現われる現象はその普遍概念の歪んだ影に過ぎぬとされる。唯名論では，名前は名前にすぎず，これに対応する実体を求めようとするのは徒労であるとされ，たとえば特性語は様々の心理現象を分析的に知覚することを失敗した結果にすぎぬという。従って，特性語に対応する特性という実体を想定するのは根拠のないことになる。

Allport は，特性語にほぼ対応する心理生理的構造すなわち特性が個々人の中に実在することを想定する。唯名論はこのような実体を否定し，スコラ的実在論は，現象にすぎぬ個々の人間の中に実在をもとめようとしない。名前と具体的現象の対応を認める素朴実在論の考え方が Allport の考え方に最も近いように思われる。もちろん彼の論述には，こう断定できない面はあるし，心理学とは分野の異なる哲学の枠組で解釈するのも危険であるが，彼の基本的な姿勢はそうであろうと思われる。

さて，素朴実在論的な観点からすると，あらゆる特性語にはそれに対応する特性があると考えねばならない。しかしそうはいえないことはもちろんであって，心理生理的構造としての特性を表示しない特性語も存在する。特性語と特性の対応を主張するためには，そのようなみせかけの特性語を除外する必要があるだろう。そこで彼等は，みせかけの特性語から真の特性語を分

類する基準として，単語の意味が非評価的（more neutral, less censorial）であるという基準を挙げた。たとえば，「すばらしい」とか「ひどい」という形容詞は，形容された人物の心理生理的な特徴を記述しているのではなくて，その人物を外から評価しているに過ぎない。従ってこのような形容詞は真の特性語とは認められない。Allport and Odbert はこの分類基準を設けた点，少なくともこの基準に気付いた点で，彼等の特性語収集が，それ以前の唯一の体系的研究である性格学者 Baumgarten の収集*に勝るとする。

このように，特性を記述するのが特性語であって，評価する単語は特性語ではないという Allport らの基準は，特性語の特徴を考える上で重要である。しかし彼等の集めた特性語を検討すると，これらは必ずしも非評価的ではないようである。これを裏づける資料に，Allport and Odbert の集めた特性語を好ましさ（likableness）の評定尺度上で評定を実施した Anderson（1968）の研究がある。この研究は実用的な観点から特性語の属性を調べたものであり，とくに理論的意味づけはなされていないのであるが，ここでは Anderson の結果を次のように解釈してみた。すなわち，もし特性語が非評価的ならば，特性語は尺度上の中間点を最頻点にして左右に正規様の度数分布をとるはずである。ところが実際には尺度の左右両極の近くにモードをもつ双峰性分布を示したのである。つまり多くの特性語は，好ましいか好ましくないかのいずれかの評価性を帯びていた。これと似た結果は他の研究（Edwards, 1970）や他の国語での研究（Hofstee, 1969）にもみられる。

結局，特性語の評価性はこのような統計的検討をまつまでもなく，日常の自明の事実といってもよいことかもしれない。たとえば，「正直」という特性語には，正直という特性を記述すると共に，その特性が好ましいという評価判断が含まれている。その特性が好ましさを欠く場合は「バカ正直」という表現が既に日常語の中に準備されているのである。

---

* Baumgarten, F. 1933 Die Charaktereigenschaften. *Beiträge zur Charakter- und Persönlichkeitsforschung,* Vol.1, Bern: A. Francke A. G.
Baumgarten, F. 1936 Character qualities. *Brit. J. Psychol.,* Vol.26.

特性語は特性を記述するものでなければならぬという基準は依然として重要であるが，非評価性の基準には上述のように疑問が残る。ただ，人格ないしは特性という対象を表現する枠として特性語を位置づけてしまうと，評価性の如き人格外要因が特性語の中に含まれるのを容認できなくなることは，その論理の自然な帰結であったように察せられるのである。

2．その他の特性語論

1）R. B. Cattell

Cattell は，のちに因子論と結合して展開される共通特性理論の主導者の一人であり，ここに引用する論文（Cattell, 1943）はその理論展開の端緒となるものである。彼は特性語を扱うにあたってまず，「人格の主要側面はすべて言語の中に登録されている」*という仮定をした。この仮定によれば，言語の綿密な検討がそのまま人格の解明につながるはずである。そこで Cattell は Allport and Odbert の収集した約 4,500 語の特性語を素材として，次のような手続で人格の基本的次元をとりだそうとした。

まず，約 4,500 語を意味的に類義や反義の群にまとめて，171 個の語群（phenomenal clusters）に分類整理した。その際の類義と反義の意味判断は，論理的にでなく，心理的な観点からなされた。たとえば，*acquisitive* と *generous* とは論理的にみれば反義関係といえるが，心理的には両語は別の属性を指示するから，各々別のクラスターに属させた。次に，171 個の現象クラスターを使って，被験者に彼等の知人 100 人の人格を評定させた。この評定結果からクラスター間の相関を計算し，その相関の大小にもとづいて，60 個の核クラスター（cluster cores or nuclear clusters）を取出した。そしてこれを人格の基本的因子とみなしたのである。

---

* "The position we shall adopt is a very direct one, verging on a pragmatic philosophy, and making only the one assumption that all aspects of human personality which are or have been of importance, interest, or utility have already become recorded in the substance of language." (p.483)

以上のような手順にみられるCattellの特性及び特性語論の特徴を，Allportと比較してみよう。まず，特性語が特性を記述しているとみなす点で両者は共通の考え方をもつとみなしてよいであろう。しかしその反面，両者は次のように非常に異なっている。第一に，Allportは特性語の類義性という考え方を疑うが，Cattellはこれをほぼ全面的にうけいれる。これに関連して第二に，Allportにおける特性は，個々の現象の微妙な差異に言及する記述概念としての色彩が強い。これに対してCattellは特性を最終的には少数の説明概念に仕立てようとする。その結果，第三に，Allportにあっては，特性語は特性そのものを指示していたので，特性語の検討は彼の体系において重要な位置を占めていた。これに対してCattellにあっては，特性語は，説明概念としての特性を抽象するための素材にすぎなかった。

既に述べたように彼は，特性語が人格の全領域をおおう，という趣旨の仮定をした。この仮定は，Allportが「多くの特性には名前がない」といって慎重に留保した点を大胆に踏み越えたものである。この点でCattellの方が特性語に重きをおくかにみえたが，実際にはそうでなかったことは，上述の彼の方法論から推察されるのである。

2）S. E. Asch

上述のように，AllportとCattellの見解にはかなりの相異が認められるが，人格や特性そのものを考察対象とする点では共通する。これに対して，人格や特性の知覚や認知を吟味することによって，人格に接近する方法もありうる。Asch（1946）はこの系列に属すると考えてよいだろう。この論文は他者に対する印象形成に関するものであるが，ここでは自己への印象形成も含まれるものとして考えてみたい。

Aschによれば，印象形成に関しては次の三つの考え方がある。①人はいくつかの特性をもち，その一つ一つが独立の印象価をもつ。そして，相手に与える全体印象の和である，といういわゆる要素論的立場。多くの質問紙法や評定法はこの立場に立つ。②全体印象は個々の印象の和であるが，これに加えて，正か負の方向をもつ感情的要因（affective force）が印象全体に影響を

及ぼす，という考え方。③印象形成とは個々の特性への印象の和ではなく，これらの間の統合的関係すなわち構造の知覚である，というゲシタルト理論の考え方。

Asch は③のゲシタルト的立場に立って，いくつかの実験を行なった。その一つ（実験１）は次のとおりである。すなわち，下記のような特性語７語から成るリスト２種を作り，２群の被験者に呈示した。そしてこれらの特性語で表現される人物を，文章記述と摘出表法（Check-list）で表現させた。

リストＡ：intelligent - skillful - industrious - *warm* - determined - practical - cautious

リストＢ：intelligent - skillful - industrious - *cold* - determined - practical - cautious

上記の2リストは7語中1語だけが異なるにすぎないが（*warm* vs. *cold*），印象評定の結果をみると，２リストからの印象は非常に異なるものであった。従って，各リストの印象は *warm* or *cold* が中心になって構成されていたのであり，他の特性語の印象は，中心質たる *warm* or *cold* に影響を受ける周辺質に過ぎぬ，と考えられた。

それでは *warm* or *cold* はどんな文脈にあっても全体印象を決定する中心質となるだろうか。これを確めるために次のリストが作られた（実験４）。

リストＡ：obedient - weak - shallow - *warm* - unambitious - vain

リストＢ：vain - shrewd - unscrupulous - *warm* - shallow - envious

手続は実験１と同じである。もしここでも warm が中心質の役割をもつのであれば，２リストから得られる印象は同様のものであるはずである。しかし結果をみると，２リストからは全く異なる印象が得られた上，*warm* 自体の印象価もリストＡとリストＢとでは異なっていた。すなわち，リストＡでの *warm* は消極性や無力さに近い意味となり，リストＢの *warm* はみせかけのものとみられ，不誠実さに近い意味に解釈されていた。つまりここでの *warm* は全体から影響を受ける周辺質の役割しかもたなかったわけである。なお，Wishner (1960) は，これらの実験をより洗練された技法を使って再検討している。

以上をまとめれば次のようになるだろう。まず，一定文脈においてその全体印象を決定する中心的特性がある。しかし，その特性はどんな文脈内でも中心的な役割をもつのではなく，他の文脈では周辺的な役割しかもたぬこともある。つまり，個々の特性が各々独立の印象価をもつのではなく，特性間の関係のしかたが個々の特性の印象価を規定する。

Asch の主張は大略以上のようであるが，これをみて感じられる疑問点を次に記そう。まず，知覚のゲシタルトにおいては，図と地の分離にしろまとまりの知覚にしろ，これを規定する刺激内要因（閉鎖領域，近接の要因，よい連続の要因，など）が特定されている。これに対し，Asch の実験においては，*warm* を中心質にしたり周辺質にしたりする要因が何かということが必ずしも明らかにされていない。次に，彼のゲシタルト的立場は，実験の具体的展開においては，感情要因を加味した要素論的立場から，十分に区別されていないように思われる。

最後に，Asch を Allport と比較してみよう。次に述べるはじめの2点は共通点，あとの2点は相異点である。第一に，Allport は個々人にはそれぞれ focal disposition があると考えた。Asch もまた，全体に影響を与える central quality に注目した。第二に，Allport は特性語の類義性を認めなかった。Asch においては，特性語の類義性はそれが置かれた文脈によって決まるもので，それを離れては類義性は決められない，と考えられるであろう。第三に，このような主張は，Allport においては個々人の独自性を強調する観点からなされるのに対して，Asch においてはむしろ知覚対象の統合性を強調する観点による。第四に，Allport は特性語の研究が実りのあるものと考えたが，しかし，彼においては，結局のところ特性語は特性という対象を表現する記号にすぎなかった。これに対して，Asch が問題とするのは，特性語が現に意味するところのものであって，その背後に特性という実体を想定していない。つまり，特性という対象そのものの枠組として特性語を考える Allport に対して，Asch は，人格や特性を認知する枠組として特性語を位置づけているように思われる。

3）最近の考え方

ここでは，人格測定における意味的要因の存在を強調する立場を紹介する。

Mulaik (1964) は 76 対の特性評定尺度（意味微分形式の尺度）を準備し，これらの尺度上で，或る被験者群には現実の人物（被験者の知人など）を評定させ，別の群には特性語を評定させた。この評定結果を因子分析すると，現実人物評定の因子構造と，特性語評定の因子構造との間にはかなりの一致がみられた。このことから，現実人物の評定の解析の結果得られる人格要因（personal factors）の中には，人格外の要因 すなわち言葉のもつ概念要因（conceptual factors）が含まれている，と考察された。

Loehlin (1961) は，意味微分法，類似性評定，および Role Title Test なる方法を使って，特性語数語と自己を評定させた。評定結果から，自己と特性語の間の距離と特性語相互の距離を，方法毎，被験者毎に算出した。そしてこれにやや複雑な操作を加えた結果，大略次のような知見を得た。すなわち，自己と特性語の間の距離判断は個人によって異なる。この差異を各個人のもつ自己像の差異とみなせなくはない。ところが，この差異に対応して，特性語相互の距離判断に差異があることがわかった。たとえば，自分を *solemm* だと判断した個人は，*solemn* が *expressive* や *considerable* に近いと判断する。他方，自分を *solemn* でないと判断する個人は，*solemn* が *submissive* や *obstructive* に近いと判断する傾向がみとめられた。従って，自己ないしは自己像の差異とみなされてきたものの中には，実は個々人が特性語に与える意味づけの差異が含まれている，と考察された。なお，Loehlin (1967) はこれよりさらに工夫された実験で，上記の結論を再確認している。

論文の紹介は以上であるが，この種の研究はまだ他に多くあると思われるし，それらが全体としてどのような方向に議論を展開しているのかは不明である。ただ，上記の報告だけから敢えて推察すれば次のようになる。すなわち，この種の研究には，特性語の対象指示機能に一定の限界を見出そうとする傾向がある。そして，特性ないしは人格という対象要因の代りに，特性語の意味要因を強調する。しかし，意味的要因の操作的定義は一義的にされて

いない。たとえば，Mulaik における意味は C. E. Osgood 系統の意味微分的技法によって規定されるもので，個人差を捨象した外的な意味といえよう。これに対して，Loehlin における意味は個々人の中にある内的な意味とみなされている。そしてこの背景には G. A. Kelly の personal constructs の理論があるようである。

3．ACL に向っての予備的考察

1）ACL の特異性

ここでは，特性語を項目とするために ACL に生じると思われる特異性を，主に人格質問紙と比較して論じる。

①特性語の不足から生じる ACL の限界：「名前のない特性は沢山ある」という Allport and Odbert の言葉は，特性語による人格記述の限界を認めた妥当な見解である。特性語の網の目から抜け落ちた人格側面は沢山あり，その中には重要な人格側面も含まれているだろう。たとえば精神分析学者 Jung のいうアニムスとアニマの共存性と相補性を適切に表現する日常語はないのである。この点で，「importance, interest, utility のいずれかの条件を満たす人格側面は既に言語の中に登録されている」という Cattell の仮定は妥当とはいえない。従って，特性語を用いる ACL がすべての人格側面を測定できないことは明らかである。

上記のことを具体的に考えてみよう。たとえば，多くの場合「人なつっこい」人物や，「つっけんどん」な人物を ACL によって特徴づけることは簡単であろう。何故なら，それぞれの特性語が ACL 全体空間において占める位置にその人物を位置づければよいからである。これに対して，「人なつっこい」と「つっけんどん」という対立的な二つの傾向を兼備し，これといった外的条件もなしにこの二つの傾向が交替して現れる人物の場合はどうであろうか。この人物は両方の特性語にチェックするか，そうでなければ両方にチェックをしないであろう。そのいずれの場合でもこの人物は ACL 空間の原点近辺に位置づけられてしまい，人なつっこくもなく，つっけんどんでもない普

通の人物と区別できなくなってしまうのである。つまり，この人物をこのような特性語で特徴づけることはできず，「気分屋」とか「気まぐれ」という特性語を項目として採用することによって辛うじて特徴づけられるのである。裏を返せば，もしこれらの単語がなければ，ACL はこの人物の性格を特徴づけることができないということである。

これに対して，文章表現を項目とする人格質問紙には，ACL にあるような欠陥はない。文章を使えばほとんど無限の表現様式がありうるので，これを項目とする人格質問紙は人格の全側面を測定できる可能性をもつ。もっとも，現実の人格質問紙は人格の全側面にわたるものではなく，一定の人格理論において重要と考えられている人格側面についての項目を準備することが多いようである。たとえば，MPI は H. J. Eysenck の人格理論で重要とみなされている人格側面に関する質問紙であるし，MMPI は精神病理学で重要とみなされる人格側面に関する質問紙である。こうして，人格理論の多様性に応じて，人格質問紙も多様に作成されることになる。

②認知枠としての特性語：Allport は特性という人格単位の必要性を認め，反特性論はこれを認めなかった。この論争においては，特性の存在，或いはその存在を想定する必要性が問題となった。このような文脈においては，特性語を項目とする ACL の意義は，特性という人格単位の存在の有無に依存する。つまり，特性が存在しなければ，特性語を項目とする ACL は無意味なものとなるわけである。

これに対してもっと別の考え方もありえよう。つまり，特性の存在については確かに議論の余地があるが，特性語の存在はほぼ自明の事実なのである。たとえば，「正直」な人物や行動が存在するかどうかは不明である。しかし「正直」という言葉は存在する。このような特性語を，存在の不確かな特性を表わす枠組とみなすのではなく，自己及び他者の人格を認知する枠組として位置づけることもできよう。

ただし，人格認知が特性語を枠組にしてなされるといえる根拠はない。というのは，認知は表情や言語などの表現手段を介してはじめて外在化される

ものであるが，本来あくまで心の内的現象なのであって，その様式が表現手段の形式と同じものかどうかはわからないからである。この点を厳密に考えるなら，自己及び他者の人格を表現する枠組として特性語を位置づけるのが適当かもしれない。「A君は正直だ」とか「B君はまじめだ」といった表現に，私達は日常接することが非常に多い。この点において，特性語が表現枠として存在するといえる明白な根拠がある。

特性語のこのような位置づけの利点は，評価性のような人格外要因が特性語の中に含まれることを簡単に容認できるということにある。つまり，Allport のように特性語を対象枠とみた場合は，その中に対象外要因を含めるわけにはいかない。これに対し，認知や表現の枠とみなした場合は，特性語の中に，よいか悪いかの評価判断が含まれるのはむしろ自然なこととみなせるのである。たとえば，「正直」という特性語は正直という特性を記述すると同時に，それが良いものだという評価判断を含むといえよう。一つの単語の中に記述と評価という異なる二要因が含まれるのは，おそらく両者が相関的であるからであろう。つまり，正直が多くの場合良いのであれば，両者を別々に表現せず，単一の単語ですませるのが表現の節約になるからである。

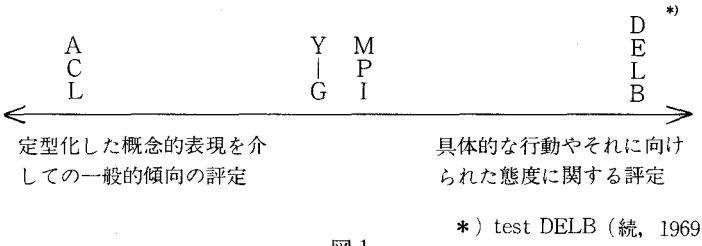
Asch によれば，特性認知の説明には，要素論とゲシタルト論の他に，その両者の中間型態として，個々の特性の認知と共に，認知の全体方向を決める affective force の存在を認める立場があるという。評価性を含む特性語を項目とする ACL はこの考え方に近いテスト法といえよう。

これに対して，人格質問紙は文章表現のしかた次第で，評価性を除去しようとすることができる。現に多くの人格質問紙は，評価的に中性と思われる項目から成り立っている。それによってもなお評価性を除去できない場合は，評価性と相関する部分を原データから統計的に除去する技法も工夫されている（肥田野，1971)。この技法は ACL にも適用できないわけではないが，しかし，評価性が特性語の重要な構成要素であることを考えれば，その適用には消極的であるべきであろうと思われる。

③ ACL の測定水準：測定水準によって ACL を他の質問紙と比較すれば，

図1のようになる。この図によれば，ACL は DELB の対極に位置する。なお，DELB はのちに CDPA という質問紙に発展するもので，評定結果をその反応パターンによって解釈するという点で独創的な人格検査として知られているが，項目の内容についても，具体的行動の水準での質問項目を作るという点を，従来の人格質問紙よりもさらに徹底させたという意味で注目すべき質問紙である。一方，ACL は具体的な行動には言及せず，これより抽象的な水準すなわち Allport のいう特性の水準で質問項目を作るのである。なお，よく知られた他の質問紙（MPI, Y-G）は，この両者の中間に位置にあるともいえるし，両者の特徴を兼備するともいえよう。

上記の分類を利き手の測定にたとえてみよう。DELB ならば，「どちらの手で字を書くか」，「どちらの手で球を投げるか」と質問するであろう。これに対して ACL ならば，「どちらの手が利き手か」と質問する。つまり ACL は，現実の諸行動の背後にあると想定される一般的傾向を表わす概念に直接訴えるのである。



＊）test DELB（続，1969）

図1．

2）ACL 作成の諸方法

①項目の収集法：これを大別すれば次の二つに分けられる。その一つは，特性語の条件を予め定めておき，これを満たす単語を辞書から取出す方法である。この代表例としては Allport and Odbert の研究が挙げられる。彼等はウェブスター辞典から広義の特性語を約 18,000 語取出した。日本語では，古浦（1952）*が大日本国語辞典から約 6,500 語，青木（1971）が明解国語辞典から約 4,000 語の広義の特性語を取出している。なお，Allport and Odbert によ

れば，彼等以前にもこの種の試みが英語やドイツ語においてかなりなされているようである。

もう一つの方法は，普通人の記憶を辞書とみなして，この中から特性語を取出していく方法である。この方法には，被験者が男性か女性か，高年者か若年者かによって，収集される特性語の種類がちがってくるという難点があるが，当該被験者の母集団の中でみる限り，有用な特性語を取出せるという長所もある。さて，この方法に属するものはいくつかある。その第一は，連想法による収集である。長嶋ら(1965, 1966)は，400人の大学生に刺激語(「小さいころの私」,「私の家庭」,……)を呈示し，これから連想される形容詞を書かせた。その結果，約900語，延べにして約11,000語の形容詞を取出した。ただし，この方法の性格上，収集された形容詞は特性語だけではなく，感情表現語も含まれているようである。

第二には,「知っている性格表現用語をできるだけ沢山書いてください」という教示を被験者に与える方法がある。これによれば延べ語数では多くの特性語をとりだすことができるが，その反面，使用頻度や熟知度の高い特性語のみが抽出され，性格の多側面にわたっての収集がしにくいという心配がある。なお，この方法を使った研究を見出すことはできなかった。

第三には,「自分の性格を単語で表わしてください」という教示を用いる方法がある。この方法の長所は，被験者の性格の多様性に対応して多様な特性語を集められることにある。ただ，表現対象が自己であるために生じる次のような欠点もある。すなわち，他人の性格に対してはひんぱんに適用されるが，自分の性格に対してはあまり適用されない特性語，たとえば負の評価性を帯びる特性語はこの方法によっては取出しにくい。なお，本稿は主としてこの方法を採用した。

② ACLの分析法 —— 特性語の分類 ——：これを大別すれば，特性語の意

＊ 古浦一郎 1952 特性名辞の研究．古賀先生還暦記念心理学論文集（広島大学）．—— 青木（1971）より引用 ——

味そのものによって分類する方法と，自己評定を介して分類する方法とがある。まず前者には次の二種がある。その第一は，日常生活で行なわれている単語の使い分けにみられる分類法である。たとえば，「彼はまじめだが決断力に欠ける」という表現には，既に特性語の分類が含まれている。この方法は計量化手順の欠如という点で原始的であるともいえる。しかし，代表的な計量的技法である因子分析でも，最後に行われる因子解釈ではこの直観的な意味分類にほぼ全面的に依存せねばならないという意味で，これは最終的な方法であるとも考えられる。

その第二は，特性語の意味分類を上記のように直観的にではなく，経験的に行う方法である。この際の教示は「二語の意味はどれほど近いか」のように意味の直接判断をもとめるやり方と，「二語の意味する特性を同一人物が兼備することがあるか」のように仮想的人物を想定するやり方がある。これを用いた研究としては，Thurstone (1934) が因子分析によって特性語を分類したのが最初であろう。さらに近年は，多次元解析法の発展に伴って，この種の分析が非常に多くなっている。

さて後者の方法は自己評定を介した特性語分類である。特性語を使って性格分析を行おうとするのであれば，その場面での項目分析は欠かせない手順であろう。これには次の二つの方法がある。その第一は，特性語を予め直観的に分類して数個の尺度にまとめておき，これを他の人格質問紙と併用して，各尺度の妥当性を確める方法である。Gough and Heilbrunはこの方法を用いている。ただ，ここでの測定単位は尺度であって，これを構成する個々の特性語の役割は明らかにならない。

この点に着目するのが第二の方法である。Parker and Veldman (1969) は，Gough and Heilbrun の ACL を構成する 300 語を約 5,000 人の男女大学生に呈示し，自己評定させた。そして特性語間のファイ係数を算出し，これに因子分析を適用して，7 個の因子を抽出した。なお，この技法は人格質問紙の項目分析にも使われる方法であり，たとえばMPI 日本版はほぼこれと同じ手続によって，項目をE尺度とN尺度とに分類している。

本稿の項目分析は大筋において，この第二の方法に属する方法によって行う。ただし，因子分析ではなく，数量化３類もしくはパタン分類法と呼ばれる方法（林，1973）を用いる。

③採点方法：一般的採点法は，どの項目にも均等な配点をするやり方である。たとえば，項目分析の結果，「明るい」，「社交的」が外向性次元に属する項目であることがわかれば，そのどちらの項目にチェックした被験者にも外向性得点１点を与える方法である。もう一つの方法は項目によって重みを変えるやり方である。たとえば「社交的」にチェックすれば２点，「明るい」にチェックすれば１点の外向性得点を被験者に与えるのである。本稿は，後者の重みづけ採点法を使った。

4．ACL の作成と適用

1）ACL の作製

①特性語の収集：「あなたは日頃自分の性格をどのように考えていますか。あなた自身の性格を，７つの単語を使って（たとえば，〝活発な〟とか〝おとなしい〟のように）要領よく形容してください。」という教示の下で，，室蘭工業大学昭和 50 年度新入学生 494 名（うち女子５名）が自己記述した。又これと同時に次の二つの教示の下に同じ学生が記述を行なった。すなわち，「あなたの知人（友人，隣人，親戚など）のうちで，日頃あなたが好意をもっている人を１人だけ思い浮べて，その人の性格を５つの単語で形容してください」（好きな人の記述）と，「あなたの知人のうちであなたが好意をもてない人を１人だけ思い浮べて，その人の性格を５つの単語で形容してください。」（嫌いな人の記述）である。実施時期は昭和 50 年４月であった。

対象者 494 名のうち無記入者は，自己記述で 45 名，好きな人の記述で 47 名，嫌いな人の記述で 66 名であった。収集された特性語の延べ語数は，自己記述では 2,119 語，好きな人の記述では 1,578 語，嫌いな人の記述では 1,382 語であった。

次に，特性語の同定基準として大略次のような基準をとった。すなわち，

語尾に若干のちがいがあっても意味がちがわないと思われる場合には1つの単語と認めるが，意味に多少ともちがいがあると思われる場合には異なる語として認めた。たとえば，「落ちついた」，「落ちついている」，「落ちつきがある」は同一の特性語とし，「気が弱い」と「弱気」は別の特性語と認めた。ただ，この点はきわめて微妙であって，十分な区別ができたとはいい難いのであるが，原則として，記述された字句どおりの形を残そうとした。こうして，自己記述では439語，好きな人の記述では347語，嫌いな人の記述では400語の特性語を得た。自己記述の特性語とその出現頻度は，付表2に示した。

② ACLの作製：自己記述において出現頻度6以上の特性語はほぼ全部，頻度5の特性語は部分的に，ACLの項目として採用した。ただし，頻度6以上あっても，否定辞を伴う特性語で，否定辞のない形の方が出現頻度の高い特性語（「落ちつきがない」，「不まじめ」，「非社交的」，……）は除外した。こうして自己記述から70語の特性語がACL項目として採用された。次に，好きな人の記述から頻度10以上で，自己記述と重複しない特性語を4語採用した。さらに，嫌いな人の記述から頻度10以上の特性語を18語採用した。最後に，筆者が以前に特性語の意味分析に用いたことのある13語を採用した（田中，1974，1975）。以上の計105語の特性語のリストが本稿のACLである。これは表1に示すとおりである。

表 1. ACL

1. 明るい	16. キザな	31. 重厚な	46. 内向的	61. あきっぽい	76. 計画的	91. 単純
2. 意地っぱり	17. 機敏な	32. 消極的	47. のんき	62. いじわる	77. 能率	92. 冷たい
3. 陰気	18. 気分屋	33. 小心な	48. 恥ずかしがり	63. うそつき	78. ごうまん	93. てれや
4. 内気	19. 協調的	34. 慎重な	49. ひかえ目	64. うるさい	79. 自主的	94. なまいき
5. おおらか	20. 口べた	35. 図々しい	50. はがらか	65. おしゃべり	80. 静かな	95. 熱中する
6. 臆病な	21. 軽薄な	36. すなお	51. 見栄っぱり	66. おっちょこちょい	81. しつこい	96. のんびり
7. 負けっぽい	22. 堅実な	37. 責任感が強い	52. 無鉄砲な	67. お人よし	82. 社交的	97. はにかみ
8. 落着きのある	23. 強引な	38. 積極的	53. 明朗	68. おもしろい	83. 正直	98. 悲観的
9. おとなしい	24. 行動的	39. そそっかしい	54. 勇敢な	69. 活動的	84. 神経質	99. ひっこみ思案
10. 思いやりのある	25. 高慢	40. 大胆な	55. 陽気	70. 頑固	85. 親切	100. まじめ
11. 温和	26. こり性	41. 短気	56. 弱気	71. 寛大	86. 心配性	101. 無口
12. 活発	27. 根気強い	42. 知的	57. 楽天的	72. 気が小さい	87. ずるい	102. 面倒くさがり
13. 感情的	28. 自己中心的	43. でしゃばり	58. 利己的	73. きちょうめん	88. 誠実	103. やさしい
14. 頑張り屋	29. 自尊心の強い	44. 努力家	59. 冷静	74. きどる	89. せっかち	104. ユーモアのある
15. 気が長い	30. 自分勝手	45. 鈍重な	60. わがまま	75. 暗い	90. だらしない	105. 楽観的

2）ACL の適用

表1に示した ACL を昭和51年度室蘭工業大学新入学生497名に配布して，次のような教示の下で自己評定をもとめた：「下記の単語は人の性格を表現するときによく使われるものです。番号順によく見て，あなたの性格に近い単語の番号に○印をつけてください。」実施時期は昭和51年4月であった。その結果，無記入者5名，女子5名を除く男子487名の資料を得，これを以下の分析の対象とした。

3）ACL の分析（田中，1976）

①項目出現率：各項目に大学生がどの程度チェックしたかを表わす項目出現率の詳細は付表1に示した。これによれば，出現率の高い項目は，

明るい（45%），口べた（44%），てれや（44%），恥ずかしがり（39%）
内気（38%），おとなしい（37%）

などであった。一方，出現率の低い項目は，

いじわる（1%），ごうまん（1%），鈍重な（1%），キザな（1%），
高慢な（1%），重厚な（1%），冷たい（2%）

などであった。項目出現率の中央値は16%，四分偏差は9.5であった。

②解析：上記の結果を数量化Ⅲ類あるいはパタン分類法といわれる方法（林，1973などを参照）によって解析した*。この方法は，アイテムとサンプルの間の相関を最大にするように，ここでは特性語と大学生の間の相関を最大にするように，各特性語と各大学生に同時に値を与える方法である。従ってこの方法を使えば，特性語の分析と同時に大学の性格分類も実行されるわけである。計算は4次元まで行われ，その固有値は大きい方から，0.2568，0.2043，0.1320，0.1140であった。その結果得られた特性語の各次元上での尺度値は付表1に示すとおりである。なお一定次元での特性語 j の値 x_j は，

$$\sum_{j=1}^{105} d_j x_j / l_n = 0, \quad \sum_{j=1}^{105} d_j x_j^2 / l_n = 1$$

* この計算と以下に示す計算のほとんどは，室蘭工業大学情報処理教育センターの FACOM 230−28 を使って行われた。

となるように基準化されている。ここで，d_j は特性語 j の出現頻度を表わし，ln は総頻度を表わす。

③ ACL の解釈基準の設定：こうして得られた ACL 空間の次元構成を解釈する基準を設けるために，次のような評定を実施した。すなわち，大学生と同年代の室蘭市内高等看護学院新入学生女子 25 名に，上記の特性語 105 語を呈示し，次の教示の下で評定を要請した：「この用紙には，私達が人の性格を表現するのによく使うことばを並べてあります。このことばの１つ１つをよく見て，そのことばが〝好ましい性格〟を意味していれば，大きい数字を，〝好ましくない性格〟を意味していれば，小さい数字を，それぞれの（　）に記入してください。ただしその場合に使える数字は **1**，**2**，**3**，**4**，**5** だけですから注意してください。」そしてこの４週間後に，同じ評定者に同じ特性語を呈示し，「そのことばが〝外向性な性格〟を意味していれば大きい数字を，〝内向的な性格〟を意味すれば小さい数字を記入するように」教示した。

これら二種の評定結果のそれぞれに最適尺度法（西里，1975）を適用して第一次元を計算した。その結果，〝好ましさ〟の第一固有値は 0.8058，〝外向—内向〟は 0.5196 であった。なおこの固有値は，評定尺度のカテゴリーと特性語の間の相関比の自乗を意味する。従って，両固有値が十分大きいことは，各評定尺度上で特性語が十分弁別的な値をとりえたことを示している。そして，その傾向は〝好ましさ〟評定尺度上でより大であった。こうして得られた評定尺度の５段階カテゴリー（**1**，**2**，**3**，**4**，**5**）の間隔は図２に示し，これらの尺度上での特性語の値（この値は ACL 尺度値と同様に基準化されている）は付表１に，その度数分布は図３に示した。図２をみると，形式上は５段階カテゴリーであるが，心理的には **1** と **2**，**3**，**4** と **5** の３段階のカテゴリーになっていることがわかる。そしてこの傾向は〝好ましさ〟評定尺度において著しい。すなわち事実上，〝好ましくない〟，〝どちらでもない〟，〝好ましい〟の３つのカテゴリーとなる。次に図３をみると，〝好ましさ〟尺度上で特性語の値は両極にモードをもつ双峰性分布を示すのに対し，〝外向—内向〟尺度上では中間的なカテゴリーにモードをもつ分布を示す。すなわち，

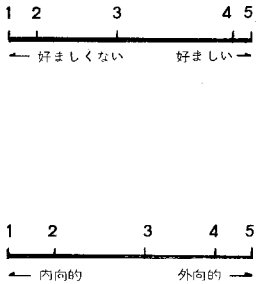


図2．評定尺度のカテゴリー間隔

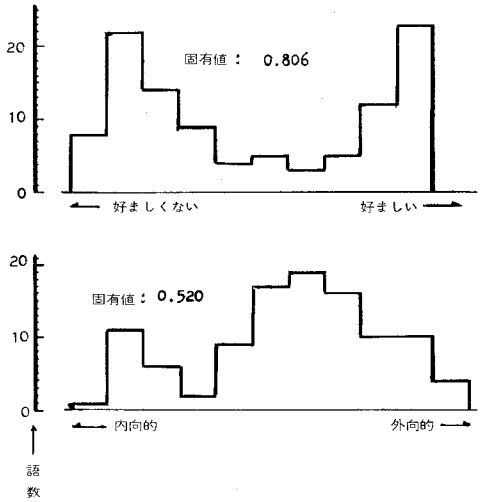


図3．各尺度上の特性語の度数分布

特性語の大半は〝好ましい〟か〝好ましくない〟かいずれかの意味をもち，そのどちらでもない評価的に中性の特性語は少ない。これに対して，〝外向—内向〟上ではそのどちらともいえない中性の特性語が最も多い。

④ ACL の次元構成：各特性語の〝好ましさ〟の値と〝外向性〟の値を，大学生の自己評定による ACL 空間の客観的解釈のための外部基準とする。各特性語の評定尺度値と，ACL 各次元上の座標値の間の相関を計算した。これは表2に示した。なお1％の危険率で有意水準に達するには 0.25 以上の相関が必要であるが，これを満たすものは太字で示した。まず，ACL の出現率は〝好ましさ〟に有意な相関をもつ。これは，項目の承認率（出現率）は項目の評価性と関連が深いという従来の知見に対応する結果である。次に ACL の次元構成について述べる。ACL 第1次元は〝好ましさ〟に対して有意な相関（r=0.38）をもつが，〝外向性〟に対して非常に高い相関（r=0.89）をもつ。第2次元は〝好ましさ〟に対して非常に高い相関（r=0.84）をもつ。第3，第4次元は評定尺度との間に有意な相関はもたなかった。以上のことを2次元平面に図示すれば図4のようになる。この図を見れば，〝外向性〟尺度

表2． ＡＣＬと評尺度の相関（n＝105語）

ＡＣＬ ＼ 評定尺度	出現率	次元 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
〝好ましさ〟	**0.37**	**0.38**	**0.84**	−0.16	−0.20
〝外 向 性〟	−0.09	**0.89**	0.10	0.08	−0.08

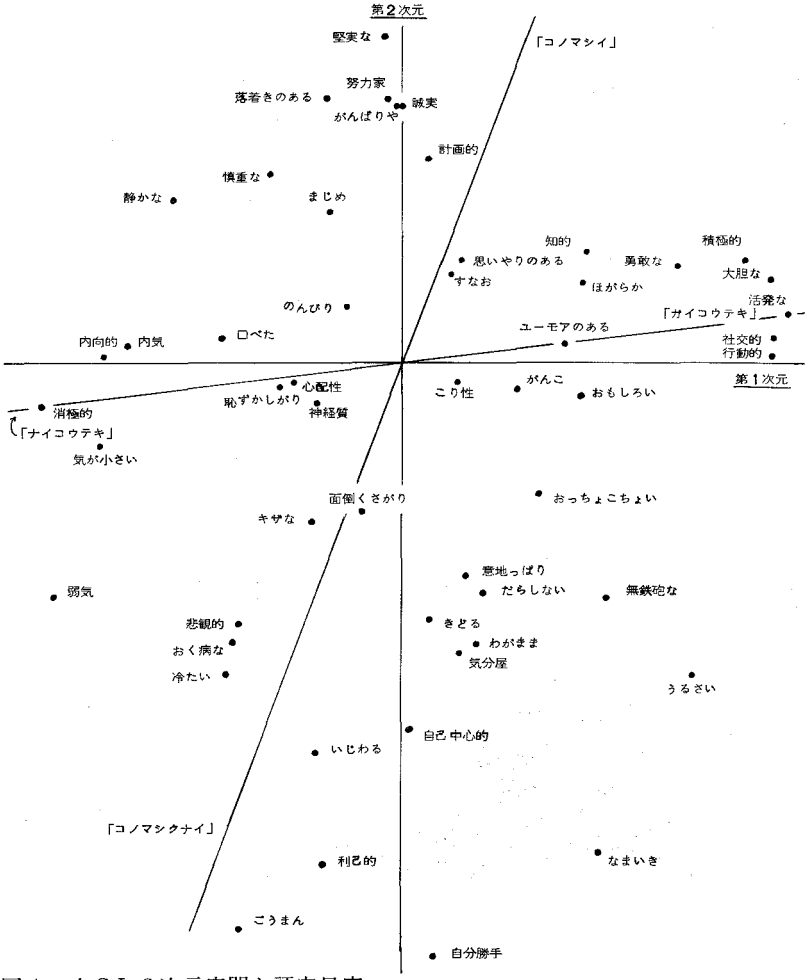


図4．ＡＣＬ２次元空間と評定尺度

はACL第1次元にほぼ沿っており，〝好ましさ〟尺度はACL第2次元にかなり近い。このことから，ACL第1次元は外向性を，第2次元は好ましさを表わすものと解釈した。ただ，〝好ましさ〟は第1次元への相関も有意なので，第2次元の解釈は第1次元ほど確実とはいえない。なお，〝外向性〟と〝好ましさ〟の間には0.46の相関があった。なお，図4に示した特性語は，紙面の都合で105語から無作為に取出した52語のみである。

ACLの第3次元以降は評定尺度によっては解釈できないので，次のような手順でその意味を推察する。まず，ACL第3次元で座標値の大きい特性語は，

頑張り屋（2.15），根気強い（2.35），自己中心的（2.32），自分勝手（2.52），利己的（2.98），きちょうめん（2.02）

などであった。一方，座標値の小さい特性語は，次の語などであった。

おおらかな（−1.07），のんき（−1.59），明朗（−1.22），陽気（−1.04），楽天的（−1.23），おしゃべり（−1.10），だらしない（−1.30），のんびり（−1.37）

従って，ACL第3次元は緊張度をあらわす次元ではないかと推察された。なお，第4次元についてもこれと同様の解釈を試みたが，解釈は困難であった。

4）ACLによる性格分類 —— 人格質問紙との比較 ——（田中，1977）

既に述べたように，ACLの自己評定結果に数量化Ⅲ類を適用すれば，アイ

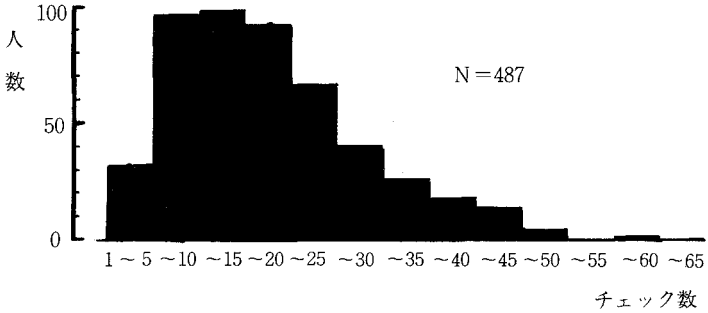


図5．ACLへのチェック数の分布

表3． ＭＰＩとＡＣＬの相関（N=253）

ＭＰＩ ＼ ＡＣＬ		チェック数	次元 Ⅰ（〝外向性〟）	Ⅱ（〝好ましさ〟）	Ⅲ（緊張度）	Ⅳ（不　明）
尺度	Ｅ（外向性）	−0.11	**0.60**	0.06	−0.05	0.01
	Ｎ（神経症）	**0.22**	**−0.22**	**−0.27**	**0.17**	−0.14
	Ｌ（虚　偽）	−0.09	0.03	**0.24**	−0.08	0.04
「？」数		−0.02	−0.15	−0.07	0.09	0.01

テムとしての特性語の値と同時に，サンプルとしての大学生の値も決定される。つまり，先の分析において既に大学生の１人１人に数値が与えられているのである。ここではこの数値を，ACL にあらわれる各個人の性格特徴とみなすことにする。

①チェック数：各学生が ACL でチェックした数をあらわす。図５はその分布を示したものである。全学生の 90％はチェック数 30 以内である。

② MPI との比較： ACL の妥当性を確めるために，同じ大学生に対して MPI を実施した。実施時期は昭和 51 年６月と９月であった。その結果 253 名の資料を得た。そして，MPI 下位得点（Ｅ尺度，Ｎ尺度，Ｌ尺度，「？」数）と ACL 次元得点の間の相関をもとめたのが表３である。太字で示したのは１％水準で有意な相関である。この中に特に注目されるのは，ACL 第一次元と MPI のＥ尺度の間に高い相関(0.60)がみられることである。辞義的な面からみれば当然でもあるが，両法の成立事情の相異を考えれば，むしろ異様な結果ともいうべきものである。この他にも有意な相関はあるが，それほど高いものではなかった。

③Ｙ−Ｇとの比較：同じ大学生に対してＹ−Ｇ性格検査を実施した。実施時期は MPI と同じである。その結果，103 名の資料を得た。なお，Ｙ−Ｇには 12 尺度があるが，この各々について相関をもとめるのはやや煩雑になるように思われるので，ここでは最終的な性格類型の判定に直接関連のある系統値（Ｅ，Ｃ，Ａ，Ｂ，Ｄ）をＹ−Ｇの下位得点とみなし，これらに対する ACL

表4． Y－GとACLの相関（N=103）

ACL / Y－G		チェック数	次元 I（〝外向性〞）	II（〝好ましさ〞）	III（緊張度）	IV（不 明）
系統値	E（不安定消極）	**0.31**	**−0.44**	−0.13	0.08	−0.18
	C（安定消極）	−0.09	−0.15	0.17	−0.16	**0.25**
	A（中 間）	−0.08	−0.17	−0.04	0.08	−0.19
	B（不安定積極）	0.16	**0.32**	−0.10	0.09	−0.04
	D（安定積極）	−0.22	**0.53**	0.16	−0.14	**0.31**

次元得点をもとめたのが表4である。太字は1％水準で有意な相関である。このうちでは，ACL第一次元がY-GのD系統値に正の相関を，E系統値に負の相関を示すのが注目される。また，解釈困難であったACL第4次元は，MPIに対しては有意な相関はなかったが，Y-Gに対しては，CとD系統（情緒安定傾向）に正の相関があるのは興味深い。

5）考察

①項目の出現率と評価性：人格質問紙では，被験者のチェックした項目を尺度ごとに加算して，その被験者の性格得点を算定することが多い。もし或る尺度の中に出現率が異常に高い或いは低い項目だけが含まれるとすれば，その尺度得点は項目出現率という人格外要因を反映するにすぎないということも考えられる。それではこの項目出現率の規定要因は何か。Edwards(1970)によれば，人格質問紙の項目出現率が，当該項目の社会的望ましさ（social desirability），すなわちここでいう評価性と高い相関があり，さらにACLにおいても両者の間には0.92という極度に高い相関がみられたという。

本稿の結果ではこの両者の相関は0.37であった。これは統計的に有意ではあるが，Edwardsほど極端なものではなかった。むしろ個々の項目をみれば，高出現率の項目の中には，「口べた」とか「神経質」のように負の評価語も含まれるし，低出現率の項目の中には「重厚な」とか「勇敢な」という正の評価語も含まれていた。このことから，項目出現率に影響を及ぼすのは項目の

評価性だけではなく，その使用頻度や熟知性も関与するのではないかと思われた。

② ACL の次元構成と項目の評価性：ACL 項目である特性語を「好ましさ」尺度上で評定すると，特性語の大半は「好ましい」か「好ましくない」かいずれかの評価性をもつことが知られた。この結果は Anderson や Hofstee の結果と調和する。

Edwards は，特性語のこのような評価性要因が ACL の自己評定の因子構造にも影響を与えることを示唆した。すなわち，彼は特性語 90 語を項目とする ACL を約 300 名の男女大学生に配布し，この上で自己評定を行わせた結果を因子分析すると，その第一因子（未回転）での項目の因子負荷量が各項目の社会的望ましさの値に対して 0.90 の相関があることを見出した。つまり，ACL の因子構造の最大の規定要因は項目の評価性であったわけである。

これに対して本稿では，ACL 第一次元は「外向性」に対して 0.89 の相関をもち，評価性要因（「好ましさ」）はむしろ第二次元に 0.84 の相関を示す。つまり本稿では，評価性要因は ACL 次元構造の第二の規定要因としてあらわれたわけである。このような結果の相異の原因としては，特性語の収集法や ACL の実施法や解析法の相異などが考えられるが，今のところどれと特定はできない。ただ，本稿の各次元の固有値の大きさをみると，第一と第二の固有値が共に大きく，この二つと第三固有値の間にやや差があることがわかる。このことから，第一と第二次元は拮抗する次元であって，わずかの手順のちがいで両者の相対的強度が交替することもありうると考えられる。こう考えれば Edwards と本稿の結果にはそれほどのくいちがいはないともいえるであろう。

しかしながら本稿の ACL 次元構成では，評価性は二番目の重要性しか持たなかったことは事実である。このことは，ACL の項目の大半が意味的には明瞭な正もしくは負の評価性を帯びるにもかかわらず，その意味要因は自己評定の次元構成の第一の決定因にはなっていないという点で興味深いのである。

なお，Peabody (1967) は特性語の意味を多次元解析して，評価性が特性語の重要な意味側面とはいえぬという，或る意味では本稿の結果と調和する結果を導出した。これに対して Rosenberg and Olshan (1970) は，特性語の意味の多次元空間に対する「よい－悪い」の評定尺度の重相関はきわめて高く，従って，評価性は依然として強力な意味要因だと反論した。このように Rosenberg and Olshan は，意味空間の解釈基準としてこの空間に対する一定評定尺度の重相関を採用しているが，重相関という解釈基準を採用する際には若干の注意が必要であろう。

たしかに本稿においても，二次元までで既に空間に対する重相関は評価性（「好ましさ」）($R=0.92$) の方が「外向性」($R=0.90$) 尺度を上まわっており，この傾向は次元が増加するにつれ強まる。これに対して「外向性」は ACL 第一次元に対して高い単純相関があるが，その後次元が増えても重相関はほとんど増加しない。つまり，「外向性」は多次元空間内の特定の単一次元にのみ高い相関があるという意味で，分析的な尺度だといえよう。他方，「好ましさ」という評価尺度はどの次元に対しても多少とも相関があるという意味で，浸透的な尺度であるといえよう。この点において，重相関係数という測度は，意味の分析的な側面よりも浸透的な側面を強調する測度となる。本稿の ACL 次元構成の最大規定要因となるのは，重相関を測度としてみれば「好ましさ」であり，単純相関を測度とすれば，「外向性」なのである。

③ ACL 第一次元としての「外向性」：本稿の ACL 第一次元は，「外向的—内向的」という日常語の評定尺度に対して 0.89 という高い相関があった。このことから ACL 第一次元は外向性をあらわす次元だと解釈された。

ところで，外向性あるいは内向性という人格次元は心理学では古くから問題とされているものであり，その代表的なものとしては，C. G. Jung の向性理論や，MPI を作製した H. J. Eysenck の向性理論などがある。「外向性」が第一次元として取出された本稿の結果は，このような理論と一見調和するようにも思われる。しかし，Jung や Eysenck における向性の概念は，人間の様々の意識や行動を説明するために，特別の意味を含められた理論的概念で

ある。これに対して本稿の向性はあくまで常識的な記述概念にとどまるものである。つまり本稿における向性とは,「外向的—内向的」という日常語から普通人が感知する意味を指すにすぎないのである。従って本稿の結果が従来の向性理論を支持する根拠とはならないであろう。

ところが, ACL に並行して MPI を実施し, 両者の関係を検討すると, ACL の「外向性」次元と MPI の外向性尺度の間には 0.60 というかなりの相関が見いだされた。また, ACL の「外向性」は Y-G の積極—消極系統値に対しても有意な相関があった。このことは, ACL の「外向性」と諸人格質問紙の外向性とは, 上述のように概念の性質が全く異なるにもかかわらず, 実際の操作の上では同様の側面を測っていることを示している。

人格質問紙は, 重要と考えられる人格側面に焦点をあてて作成されるものである。一方 ACL は格別の理論的背景もなく, 単に人格に対する普通人の関心を基礎とする検査である。このように発生事情の異なる検査の間に, 上記のような結果の対応がみられることは, 専門的にみて重要とされる人格側面と, 普通人が強い関心をもつ人格側面とは, 理論的にはともかくとして少なくとも操作的な水準では或る程度重複していることを示唆しているように思われる。

④ ACL 標準版作成への疑問: Gough and Heilbrun は ACL の標準版(*the* Adjective Check List) を作成した。しかしその必要はあるのだろうか。

たとえば, 世論調査が測定しようとするのは, サンプルされた人の意見ではなく, その背後にある日本人という母集団の意見である。調査の手順にまちがいがなければ, 異なる人物をサンプルしたいくつかの調査の結果は同じであるはずである。

このようなことは ACL についてもいえるであろう。すなわち, 諸家の特性語収集の研究によれば, 特性語は数千語程度の有限母集団を構成していると推定される。この母集団から一定の特性語を数回サンプルすれば, 項目の異なる数種の ACL ができあがる。本報告の ACL はこうして作られたひとつの ACL (*an* ACL) にすぎず, 他のいくつかの ACL も等しく可能である。もし,

本報告のACLの作製手順が適切であるならば，その結果は他のACLによっても得られるはずである。従って，どの特性語を使うべきかを特定する標準版作製手続はACLでは必要なものとは思われない。結局ACLにとって重要なのは項目を特定することではなく，項目の母集団を特定することであろう。項目母集団を特定すること，すなわち特性語収集は，既述のように既に何回か行われているが，さらに何回も試みる価値をもつものだと思われる。

（昭和52年5月21日受理）

文　　献

オルポート（今田恵監訳）1968　人格心理学（上，下）。誠信書房　Translated from Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality.* N. Y.: Holt.

Allport, G. W. & Odbert, H. S. 1936 Trait-names: A psycho-lexical study. *Psychol. Monog.*,**47**, Whole No. 211.

Anderson, N. H. 1968 Likableness ratings of 555 personality-trait words. *J. Pers. soc. Psychol.*,**9**, 272－279.

青木孝悦　1971　性格表現用語の心理辞典的研究――455語の選択，分類および望ましさの評定。心理学研究，**42**, 1－13.

Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **41**, 258－290.

Cattell, R. B. 1943 The description of personality : Basic traits resolved into clusters. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **38**, 476－606.

Edwards, A. L. 1970 *The measurement of personality by scales and inventories.* N. Y.: Holt.

Gough, H. G. & Heilbrun, A. B., Jr. 1965 *The adjective check list manual.* Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.

林知己夫（編）1973　比較日本人論――日本とハワイの調査から――。中公新書333，中央公論社。

肥田野直　1971　人格検査に及ぼす社会的望ましさの影響について。高木貞二（編）現代心理学の課題，pp.340－347. 東大出版会。

Hofstee, W. K. B. 1969 Method effects in judging the desirability of traits. *Educ. psychol. Measmnt.*, **29**, 583－604.

Loehlin, J. C. 1961 Word meanings and self-descriptions. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **62**, 28－34.

Loehlin, J. C. 1967 Word meanings and self-descriptions: A replication and extension. *J. Pers. soc. Psychol.*, **5**, 107－110.

Mulaik, S. A. 1964 Are personality factors raters' conceptual factors? *J. consult. Psychol.*, **28**, 506−511.

長嶋貞夫・他 1965, 1966 自我と適応の関係についての研究（1），（2）—— Self-Differential 作製の試み ——。東京教育大学教育学部紀要，**12**, 85−106；**13**, 59−83.

西里静彦 1975 応用心理尺度構成法。誠信書房。

Parker, G. V. C. & Veldman, D. J. 1969 Item factor structure of the adjective check list. *Educ. psychol. Measmnt.*, **29**, 605−613.

Peabody, D. 1967 Trait inferences: Evaluative and descriptive aspects. *J. Pers. soc. Psychol.*, **7**(4, Whole No. 644)

Rosenberg, S. & Olshan, K. 1970 Evaluative and descriptive aspects in personality perception. *J. Pers. soc. Psychol.*, **16**, 619−626.

田中潜次郎 1974 意味の多次元構造と形容詞の両極性。東北心理学研究，24 号，36−37。

田中潜次郎 1975 Sorting 法にもとづく多数の特性形容詞の意味分析。東北心理学研究，25 号，54−55。

田中潜次郎 1976 自己評定による特性用語の分析 —— 特性用語の記述性と評価性 ——。日本心理学会第 40 回大会発表論文集，935−936。

田中潜次郎 1977 特性語リストによる性格分類の試み。日本心理学会第 41 回大会発表論文集，946−947。

Thurstone, L. L. 1934 The vectors of mind. *Psychol. Rev.*, **41**, 1−32.

続 有恒（編著）1969 臨床的性格適応診断。金子書房。

Werner, H. & Kaplan, B. 1963 *Symbol formation: An organismic-developmental approach to language and the expression of thought.* N. Y.: Wiley. 柿崎祐一（監訳）1974 シンボルの形成。ミネルヴァ書房。

Wishner, J. 1960 Reanalysis of "Impressions of personality". *Psychol. Rev.*, **67**, 96−112.

追記：本稿で比較的詳細に論じた Allport and Odbert の論文について，日常言語学派哲学の影響を受けたと思われる心理学者 Bromley が，最近の著書の中で一章を設けて，理論的な検討を行なっている。Bromley, D. B. 1977 *Personality description in ordinary language.* London : Wiley.

Allport and Odbert の論文の意義は，この論文発表の数年後にはもう Cattell がこれを使った研究を発表したことからわかるように，その実用的な側面では適切な評価を受けてきたし，その評価は今日でも変らない。その反面，その方法論的意義に言及されることは極めて少なかったように思われる。この点で Bromley の著作は興味深いものであるが，本稿脱稿後に入手したためにこれに言及できなかった。これは将来の課題としたい。

付表1. ＡＣＬ項目の出現率，評定尺度値，ＡＣＬ次元座標値。

項目	出現率 %	評定尺度値 〝好ましい〟	評定尺度値 〝外向的〟	ＡＣＬ次元値 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
1）明るい	45	1.42	1.43	1.19	0.33	−0.86	−0.64
2）意地っぱり	21	−0.75	−0.26	0.39	−1.31	1.68	0.49
3）陰　気	5	−1.12	−1.88	−2.46	−1.57	−0.19	−0.02
4）内　気	38	−0.46	−1.86	−1.68	0.09	−0.20	−0.48
5）おおらか	23	1.35	0.98	−1.07	0.58	−1.07	0.71
6）臆病な	14	−0.80	−1.70	−1.03	−1.72	−0.01	−1.19
7）怒りっぽい	13	−1.05	−0.18	0.20	−1.49	1.80	−1.45
8）落着きのある	16	1.16	0.16	−0.46	1.62	0.72	1.31
9）おとなしい	37	−0.10	−1.38	−1.22	0.92	−0.32	0.67
10）思いやりのある	35	1.42	0.33	0.37	0.64	0.17	−0.32
11）温　和	35	1.20	0.11	−0.08	0.77	−0.97	0.72
12）活　発	16	1.16	1.60	2.36	0.30	−0.41	−1.99
13）感情的	18	−0.41	0.56	0.22	−1.36	1.41	−1.22
14）頑張り屋	21	1.39	0.21	−0.03	1.57	2.15	0.08
15）気が長い	13	0.56	−0.55	−0.24	1.32	−0.50	3.39
16）キザな	1	−0.97	0.54	−0.56	−0.97	2.23	1.18
17）機敏な	9	1.21	1.02	1.13	0.96	1.58	−2.23
18）気分屋	23	−1.15	0.02	0.35	−1.78	0.04	0.36
19）協調的	28	1.04	0.87	0.76	0.49	−0.30	−0.09
20）口べた	44	−0.60	−1.80	−1.10	0.15	−0.49	−0.27
21）軽薄な	10	−1.27	−0.08	0.00	−2.06	−0.05	0.22
22）堅実な	13	1.22	0.00	−0.10	2.00	1.86	−0.08
23）強引な	5	−0.57	1.00	1.55	−1.43	2.65	2.38
24）行動的	13	1.18	1.60	2.27	0.04	0.14	−1.27
25）高　慢	1	−1.24	0.01	0.18	−2.38	2.21	1.98
26）こり性	19	0.32	−0.04	0.35	−0.11	1.66	1.59
27）根気強い	15	1.41	0.31	−0.01	2.14	2.35	0.81
28）自己中心的	12	−1.25	−0.24	0.05	−2.25	2.32	1.32
29）自尊心の強い	23	−0.52	0.43	0.36	−0.44	1.16	−0.07
30）自分勝手	7	−1.22	0.15	0.20	−3.63	2.52	2.50
31）重厚な	1	1.10	−0.33	0.23	1.97	−0.74	1.38
32）消極的	25	−0.90	−1.89	−2.21	−0.29	−0.81	−0.83
33）小心な	11	−0.73	−1.51	−1.33	−0.92	−0.33	−0.78
34）慎重な	27	1.00	−0.22	−0.80	1.15	0.85	−0.28
35）図々しい	6	−1.17	0.72	1.19	−1.84	−0.18	0.36

項　　目	出現率%	評定尺度値 〝好ましい〟	評定尺度値 〝外向的〟	ACL次元値 I	ACL次元値 II	ACL次元値 III	ACL次元値 IV
36）すなお	29	1.32	0.53	0.31	0.55	−0.68	−0.29
37）責任感が強い	33	1.27	0.45	0.22	0.63	0.49	−0.31
38）積極的	10	0.98	1.60	2.10	0.64	1.45	−1.11
39）そそっかしい	33	−0.61	0.60	0.61	−0.81	−0.77	−0.33
40）大胆な	3	0.03	1.25	2.24	0.52	0.70	0.28
41）短　気	16	−0.81	0.23	−0.15	−1.37	0.44	−1.39
42）知　的	6	1.31	−0.20	1.13	0.69	0.80	0.88
43）でしゃばり	3	−1.06	0.90	0.65	−2.57	0.96	−0.23
44）努力家	20	1.30	0.03	−0.08	1.62	1.95	−0.04
45）鈍重な	1	−0.76	−0.69	−1.42	−0.45	−1.33	1.55
46）内向的	30	−0.50	−2.08	−1.82	0.03	0.08	−0.46
47）のんき	29	−0.11	−0.42	0.19	−0.16	−1.59	2.35
48）恥ずかしがり	39	−0.25	−1.25	−0.74	−0.15	−0.62	−0.92
49）ひかえ目	18	0.41	−1.41	−0.95	0.86	−0.90	−0.31
50）ほがらか	20	1.23	1.03	1.11	0.49	−0.98	−0.04
51）見栄っぽり	13	−1.05	0.81	0.29	−1.26	0.24	0.11
52）無鉄砲な	4	−0.66	0.53	1.25	−1.43	0.37	0.61
53）明　朗	19	1.40	1.45	1.49	0.41	−1.22	−0.57
54）勇敢な	3	1.15	1.16	1.68	0.60	−0.05	−2.41
55）陽　気	27	1.34	1.62	1.30	0.09	−1.04	−0.66
56）弱　気	10	−0.79	−1.77	−2.14	−1.43	−0.88	−0.45
57）楽天的	32	0.85	1.43	1.04	−0.17	−1.23	1.37
58）利己的	8	−1.05	−0.13	−0.48	−3.07	2.98	1.92
59）冷　静	11	0.99	−0.08	−0.44	1.49	0.74	1.32
60）わがまま	13	−1.20	−0.02	0.46	−1.71	0.89	−0.13
61）あきっぽい	18	−1.09	0.06	−0.36	−1.69	−0.22	0.53
62）いじわる	1	−1.26	−0.55	−0.53	−2.38	2.55	3.79
63）うそつき	3	−1.24	−0.70	−0.45	−2.61	0.54	0.85
64）うるさい	3	−0.96	0.49	1.78	−1.91	−1.00	−2.18
65）おしゃべり	6	−0.65	0.94	1.36	−2.12	−1.10	−0.67
66）おっちょこちょい	29	−0.49	0.46	0.84	−0.80	−0.99	−0.45
67）お人よし	28	0.25	−0.38	0.31	0.32	−0.83	0.30
68）おもしろい	20	0.76	1.55	1.09	−0.20	−0.91	−0.46
69）活動的	10	1.29	1.53	2.14	0.43	0.08	−2.35
70）頑　固	8	−0.59	−0.27	0.69	−0.16	1.76	0.43

項 目	出現率%	評定尺度値 〝好ましい〟	評定尺度値 〝外向的〟	ACL次元値 I	ACL次元値 II	ACL次元値 III	ACL次元値 IV
71) 寛 大	14	1.32	1.03	0.60	0.84	−0.75	1.63
72) 気が小さい	24	−0.81	−1.93	−1.85	−0.51	−0.73	−1.79
73) きちょうめん	24	1.15	−0.31	−0.38	1.19	2.02	0.04
74) きどる	7	−1.02	0.60	0.17	−1.58	0.96	0.51
75) 暗 い	3	−1.01	−1.89	−2.02	−1.99	−0.64	0.11
76) 計画的	19	1.20	0.37	0.16	1.25	1.17	−0.78
77) 軽 率	11	−1.16	0.13	0.29	−1.98	0.05	0.13
78) ごうまん	1	−1.19	0.50	−1.01	−3.48	1.62	3.94
79) 自主的	14	1.16	1.43	1.47	0.40	1.33	−0.87
80) 静かな	14	0.17	−1.33	−1.41	0.99	0.12	1.76
81) しつこい	7	−1.10	−0.63	0.35	−1.72	1.30	0.99
82) 社交的	9	0.64	1.54	2.25	0.16	−0.46	−0.50
83) 正 値	30	1.28	0.45	−0.05	0.73	−0.01	0.15
84) 神経質	32	−0.85	−0.96	−0.52	−0.25	0.69	−0.29
85) 親 切	26	1.37	0.47	0.38	0.64	0.15	0.01
86) 心配性	30	−0.37	−1.07	−0.66	−0.12	−0.12	−1.23
87) ずるい	5	−1.25	0.01	0.26	−1.31	2.84	0.48
88) 誠 実	15	1.29	0.44	0.00	1.57	0.86	−0.62
89) せっかち	6	−0.70	0.53	0.62	−0.76	0.30	−1.22
90) だらしない)	12	−1.22	−0.43	0.49	−1.41	−1.30	1.36
91) 単 純	16	−0.24	0.29	0.10	−1.20	−0.74	−0.54
92) 冷たい	2	−1.16	−0.65	−1.08	−1.91	2.54	3.18
93) てれや	44	0.08	−0.35	−0.47	0.18	−0.30	−0.56
94) なまいき	3	−1.16	0.28	1.22	−2.99	2.07	−0.29
95) 熱中する	26	0.70	0.32	0.37	0.49	0.55	0.68
96) のんびり	21	0.06	−0.33	−0.35	0.34	−1.37	2.95
97) はにかみ	14	−0.44	−1.73	−1.51	−0.05	−0.97	−0.71
98) 悲観的	6	−0.96	−1.56	−0.99	−1.60	0.42	−0.31
99) ひっこみ思案	21	−1.02	−1.93	−2.04	−0.41	−0.67	−0.55
100) まじめ	32	1.20	−0.57	−0.44	0.94	0.38	−0.37
101) 無 口	16	−0.66	−1.80	−2.29	0.51	−0.20	0.11
102) 面倒くさがり	32	−1.06	−0.37	−0.24	−0.91	−0.69	0.57
103) やさしい	26	1.33	0.05	0.37	0.70	−0.04	−0.29
104) ユーモアのある	30	1.12	1.40	1.00	0.12	−0.66	−0.22
105) 楽観的	28	0.70	1.23	0.74	−0.01	−0.90	1.74

付表2． 自己記述から収集された特性語とその使用頻度（頻度無記入の語はすべて頻度1）

愛情		内気	41	外向的	2	気が短い	2
あいまい		うちこまない		開放的	3	気が弱い	19
明るい	83	うちとけやすい		かげがある		聞き上手	
あきっぽい	19	移り気	3	賢い		ぎこちない	
あきやすい	2	うるさい	2	かたい		キザ	
あきらめが早い		運動好き	2	勝気	4	きさく	2
あきらめやすい		おおざっぱ		かっこわるい		きちょうめん	14
あきらめない		おおまか		勝手な	2	きどる	
あっさりした		おおらか	7	活動的	20	機敏	2
あほう		臆病	5	活発な	95	気分屋	14
甘い		怒らない		活発でない		気前がいい	
甘えや		怒りっぽい	7	我慢強い		きまぐれ	5
甘えん坊		怒りやすい		我慢しすぎ		きまじめ	3
ありきたりな		おごる		寡黙な		きまま	4
あわてもの		おしゃべり	2	考えがち		気むずかしい	3
あわてんぼ		おせっかい	2	考えこみやすい		客観的	
安易		オセンチ		考えすぎ	2	器用	3
いいかげん		おだやかな	4	考え深い		強固	
意志が弱い	3	落着きのある	11	考えっぽい		協調的	9
意志薄弱		落着きのない	9	簡潔な		協力的	2
意識しすぎ		おっちょこちょい	12	頑固な	14	きれいずき	4
一心不乱		お天気屋	2	感じやすい		気を使う	2
意地がない	2	おっとり		感受性大		気をまわす	
意地っぱり	6	男らしい	2	感情的	5	勤勉	4
意地悪		男らしくない		寛大な	3	空想的	2
一本気	2	おとなしい	180	がんばりや	3	ぐずぐず	
いやみ		おとなしすぎる		完ぺき主義		くそまじめ	
意欲的		大人に好かれる		寛容な		口うるさい	
依頼心が強い	2	お人よし	13	気がいい		口が悪い	
いらいらする		思いやりのある	6	気が多い		口数が少い	2
陰うつな		思いやりのない		気がきかない		口べた	7
陰気	7	おもしろい	5	気が小さい	20	くどい	
陰険		温厚	5	気が強い	2	くよくよしない	2
うそがきらい		温和	14	気が長い	9	くよくよする	2
うそつき		快活	4	気がはやい		暗い	2

クール		根気がない	5	正直な	21	世話やき	2
苦労性	3	根性がある	2	常識的		繊細な	2
計画的	8	細心な		小心な	15	洗たく好き	
軽率	7	さえない		情緒不安定		躁うつ的	2
軽薄	2	さっぱりした	3	情緒のない		騒騒しい	
決断力がある		寂しがり	4	情にもろい		想像性豊か	
決断力不足	4	自意識過剰		情熱的	2	そこつな	
潔白		自意識が強い		思慮深い	3	そそっかしい	
謙虚		自虐的		神経過敏		率直な	4
堅実	2	自己中心的		神経質	39	素ぼくな	2
現実的	2	思索的		信じやすい		怠惰な	
献身的	2	自主的	7	親切な	35	大胆な	2
建設的		自信過剰		慎重な	20	怠慢な	3
健全な		自信がない	2	心配性	5	妥協的	2
謙そん		静かな	13	辛抱強さ	2	打算的	2
倹約		自制心がある	3	スケベ		多弁な	
好奇心	3	自尊心が強い	13	すなお	32	ためらいがち	3
公共心		親しみやすい		図太い		頼りがいのある	
強情な	10	しっかりした		スポーツ好き	2	頼りない	
向上心		しつこい	2	ずぼらな	2	だらしない	10
行動的	8	実行力がある		ずるい	3	短気な	57
公正な	3	実行力がない		鋭い		単純な	6
合理的	2	実直な		スロー		淡白な	
こうるさい		指導性がない		誠意がある	2	力強い	
高慢		自分に厳しい		正義感	2	着実な	2
ごうまん		自分本位		清潔な	3	注意散漫	2
心の広い		地味な	2	精力的	3	調子に乗る	3
個性的	3	社交的	4	誠実な	10	調子に波がある	
こだわらない		自由な	2	精神分裂	2	直観的	
孤独な	2	従順な	3	責任感が強い	14	沈着な	
子供っぽい	2	集中できない		赤面症		付合いがいい	2
こり性	10	主体性がない		せっかちな	5	冷たい	
こわがり		受動的		積極的	15	強気な	3
細やかな		純情な		せわしい		ていねいな	
根気強い	23	消極的	47	世話好き	3	適応力がない	

適当な	3
でしゃばり	
てれや	9
天気屋	
同情的	3
動物好き	
独占欲が強い	2
独走気味	
独創的	
独断的	
どじな	2
どなる	
捕え所のない	
努力家	10
鈍感な	2
鈍くさい	
内向的	14
なげやりな	
情深い	
なまいきな	
なまけ者	2
波がある	2
涙もろい	2
成行まかせ	
にぶい	
二面的	
人間的	
人情がある	3
忍耐強い	4
ぬけめのない	
熱情的	
熱心な	
熱中する	5
粘り強い	
粘る	
乗りやすい	3
のろい	
のろま	2
のんきな	32
のんびり	15
排他的	
バカ	4
薄情な	
激しい	
恥ずかしがり	12
はっきりいう	
はつきりしない	3
話好き	4
話下手	3
はにかみや	5
早とちり	3
早のみこみ	
非外向的	
ひかえめな	6
非活動的	2
悲観的	11
非協調的	3
非社交的	6
非常識な	
非積極的	2
引込思案	8
人がいい	
人付合いがいい	
人に頼る	
人になれない	
人にやさしい	
人みしりする	4
人目を気にする	2
ひよわな	
敏感な	
無愛想な	
不安定な	5
不活発な	7
複雑な	
ふざけた	
無精な	2
不遜な	
ふてくされる	
ふぬけ	
不まじめ	
フエミニスト	
不用心	
プライドが高い	
分析的	
分別のある	
平和な	
へそまがり	
放漫な	
抱擁力	
ほがらかな	5
保守的	
ぼっさり	
凡才	
負けずぎらい	5
負けん気が強い	2
まじめな	75
まめな	
迷う	
みえっぱり	
無関心な	3
無気力な	3
無口な	23
無邪気な	2
無神経な	
無責任な	3
むだがない	
無知な	
無頓着な	
無欲な	
明朗な	37
めだたない	
めだちたい	
面くい	
面倒くさがり	6
綿密な	
ものぐさな	
物事にこだわる	
もの静かな	2
ものずきな	
躍動的	
やさしい	62
ゆううつな	
勇敢な	
勇気のある	
友好的	5
優柔不断	3
融通のきかない	
愉快な	3
夜明のガス燈	
陽気な	25
用心深い	
幼稚な	2
要領のいい	
よく笑う	
よくしゃべる	
余裕のある	
弱気な	4
弱々しい	
楽観的	29
楽天的	18

理屈っぽい	3
理屈屋	
りこうな	
利己的	12
理想主義	3
利他的	
律義な	2
良心的	
ルーズ	
礼儀知らず	
冷静な	14
冷淡な	
劣等意識	
ロマンチスト	
ロマンチック	
わがままな	12
忘れっぽい	2
笑い好き	
わりきる	